国土学事始め

大石久和
京都大学大学院
特命教授

追悼・武部建一さん

武部建一さんといってもほとんどの方はご存じないかも知れません。氏は建設省や日本道路公団（当時）で高速道路などの計画・建設にたずさわってきた技術者です。同じような経歴の技術者は大勢いるのに氏を紹介するのは、道路と歴史の関係についていろいろと研究して来られた内容を多くの方に知っていただき、関心を持ってほしいからなのです。

その昔、大和朝廷が律令による政治を始めたとき、全国に東山道・山陽道など、七つの官道を整備しました。この官道は、かつては大した道路ではないと考えられていたのですが、今日では直線性にすぐれ、幅員も9～12メートルもあったことが分かっています。それが現在の高速道路と位置的にも重なることを発見したのが武部さんなのです。

中央高速道路建設の時の経験を次のように書いています。「（当時の）高速道路の技術者は、誰も昔の駅路と同じ場所を（高速道路が）通っているなど知る由もなかった」「古代も現代も、最も早く通りたい道筋を選んだのである。それがぴったり重なった、まさに必然の結果である。」（「道路の日本史」中公新書）

山また山という地形のわが国では、たとえば名古屋から東に海道以外のルートを探そうとすれば、木曽谷に入るか、少し先の伊那谷を通るしかありません。国道19号も、ＪＲ中央本線も木曽谷にあり、中央高速道路も木曽谷から伊那谷に抜けるように立地しています。

直線性を重視する高速道路が官道と重なるようにルートを選んだのは、国土の特徴からやむを得なかったのです。氏はこれ以外にも道路の歴史について多くの業績を上げておられますが、「道路ほどその国の歴史を反映している存在はない」と記した先の新書を上梓してまもなく亡くなられました。偉大な先人に深甚なる哀悼の意を表し、ご紹介しました。